

第四百六十九回 青葉会選句表 令和七年五月二十二日(木)

出席者は吟行。(北の丸公園) 句会場所…丸紅本社 四階会議室

選者 川口孤舟

出席者 柿崎忠彦 川口孤舟 久米五郎太 佐藤ただしげ 豊田ゆたか 西澤國護

星田啓子 山崎亜也

投句・選句 熊谷くにお 後藤とみ子 小早健介 在間千恵 高橋康敏 田島正己 土谷堂哉

福島正明 古川百合子 古田昇 山田けい子 山内天牛 渡邊盛雄

選句のみ 伊賀山そらお、梅崎くすを 重枝孝岳 庄司龍平 高橋清子 橋口隆 早川允章

山本三恵

【互選句】 ◎は孤舟選者の選 選者欄(括弧内)の○は選者の「天」

十八点

◎鯉幟息を吐かせて仕舞ひけり 昇 (そ・くす・孤・忠・く・五・健・○と・千
龍・清・康・○己・○允・百・け・三・天)

十三点

単線に乗り継いでより緑濃し 孤舟 (健・と・康・堂・國・允・正・昇・啓・亜・
け・三・天)

十二点

◎杖持たぬ試歩薰風に支へられ とみ子 (そ・孤・忠・く・五・健・己・ゆ・隆・正・
亜・三)

八点

◎葉桜や古き威厳の田安門 忠彦 (くす・孤・く・た・ゆ・國・天・盛)

六点

夏蝶のブレイクダンス風柔し 孤舟 (忠・健・千・清・堂・啓)
◎半世紀馴染みし湯呑み新茶汲む 健介 (孤・千・龍・允・天・盛)
滝落つる壺に風呼ぶ木下闇 啓子 (千・た・己・○ゆ・亜・け)
利根渡る鉄橋響き夏に入る 亜也 (○そ・五・百・昇・け・三)

五点

天空の峠より見る余花の村 正己 (く・孝・康・啓・百)
江戸城跡にて ゆたか (孝・己・允・○正・百)

城跡に偲ぶ栄枯や夏の空 啓子 (そ・孤・と・康・盛)
◎風運ぶ青葉若葉の匂ひ濃し 亜也 (○健・堂・○昇・け・○三)
パナマ帽わざわざ出番作りけり

四点

葉桜や命の香りが風に舞ふ 忠彦 (そ・龍・孝・允)
◎首塚の燭の匂ひや若葉風 くに お (孤・千・百・亜)
◎司令部はレンガ造りや薄暑光 五郎太 (くす・孤・昇・天)

◎城跡の鳥の遠鳴き夏木立
デパートのお子様ランチ菖蒲の日
◎新緑や日の斑浴びたる乙女像
新人に自信も少し春はゆく

五郎太
康敏
全
正己
(孤・清・ゆ・隆)
(清・隆・昇・亜)
(孤・と・堂・昇)
(くす・忠・清・堂)

三点

◎年齢は逆走出来ずはたた神
柿若葉白を眩しく衣を干し
手古舞の金棒の音夏来る
木の橋や足音軽し夏近し
新緑の熊野古道や生氣満つ
若葉伸ぶ樹膚(きはだ)に老いの見ゆれども
さす船に仕掛け自慢の男達
薪能面(おもて)は静かに動きけり

健介
とみ子
ただしげ
正明
昇
啓子
けい子
全
(孤・五・盛)
(康・己・三)
(と・堂・け)
(國・百・亜)
(そ・た・ゆ)
(○孝・○龍・盛)
(く・五・隆)
(忠・己・啓)

二点

一列に菅笠並ぶ田植かな
停戦の道筋見えぬ緑雨かな
親友は仏となりし夏夕べ
前棒を友の担ぎて神輿入り
序の口も大きくなりて五月場所
清水濠溢れるほどの蓮花かな
瀧つせもありて経巡る北の丸

孤舟
五郎太
ゆたか
啓子
けい子
亜也
全
(た・隆)
(忠・健)
(く・天)
(くす・龍)
(くす・龍)
(千・正)
(五・康)

一点

都会には泳ぐ空無い鯉のぼり
樟の葉の揺れ新緑の風を生む
あやめ咲く城の濠端風立ちぬ
新しき茶室薫風自南来
吟行は緑いっばい風薫る
新緑を抜ける木洩れ日鳥の声
歓喜呼ぶ白き煙や夏の宵
潮騒の夢破りたる夏の宿
百合咲くや歩む貴婦人楚々として
新緑に光差し込み命生む
兄去りて五月の節句旧き家
菖蒲田や江戸の薫りと色見せる
目をそらし木の二人に花吹雪
怪異譚伝わる寺や五月闇
生け垣はみなリラの花デトロイト
母の日の妻はしやぎ出す平和かな
河鹿鳴くジェンダーフリーの宝塚

忠彦
孤舟
くにお
五郎太
ただしげ
堂哉
全
全
ゆたか
國護
全
正明
百合子
亜也
天牛
盛雄
全
(た)
(正)
(允)
(啓)
(國)
(國)
(た)
(清)
(孝)
(ゆ)
(孝)
(と)
(盛)
(啓)
(正)
(啓)
(隆)



【句評・短評】

十八点

鯉幟息を吐かせて仕舞ひけり

昇

孤舟選者……「息を吐かせて」で、鯉幟を畳む動作が浮かんでくる。

五郎太さん……中七がお上手です。

とみ子さん……大きな鯉の空気を抜くのを 息を吐かせてと表現されたのが楽しい！

千恵さん……ポールに掲げられていた時は大きな口に一杯空気を吸ってました。下ろされてからは

「息を吐かせて」平らになりました。この描写がとてもいいです！

龍平さん……お疲れ様でした……

康敏さん……子供の頃、大阪では玄関先に高いポールを立てて真鯉・緋鯉を泳がせていた。句は鯉幟をたたむ様子を巧みに描写している。東京では家が混み合っていて、高いポールは立てられない。

正己さん……鯉幟がまるで生き物のように表現する「息を吐かせて」には脱帽です。

百合子さん……お雛様を仕舞う時と同じように優しく丁寧に……

允章さん……子供の頃、祖母が丁寧に畳んでいたことを思い出しました。息を吐かせて、の表現が良
い。

天牛さん……鯉幟の息を吐かせるという表現は余り使った人はいないのではないかと思います、たい
へんな想像力ですね。

十三点

単線に乗り継いでより緑濃し

孤舟

とみ子さん……電車の両側からも 緑が迫っているようです！

康敏さん……単線が山間部に入ると木々の緑が一層に鮮やかになってきた。

啓子さん……今年は殊に緑が美しい。旅に出て単線に乗り換えると列車は山間部に分け入り、進むほどに緑
滴る樹々が重なる。何とも心洗われる景。

亜也さん……比企丘陵を縫って走る東上線の小川町以北を勝手に想像。

天牛さん……どこでしょうか。伯備線でしょうか。きつと山の中じやないでしょうか。暫く単線に乗っ
たことがないのでうらやましい。

十二点

杖持たぬ試歩薫風に支へられ

とみ子

孤舟選者……薫風が試歩を応援しているのだ。

五郎太さん……リハビリが進んでいる。外に出るのはやや心細かったが、薫風は心地よい。

ゆたかさん……ご年配の方のご努力の歩みは街中でお見掛けします。

隆さん……薫風なら心強い。

亜也さん……リハビリの順調を祈ります。

八点

葉桜や古き威厳の田安門

忠彦

孤舟選者……皇族の車がよく出入りするという畏れ多い田安門。

くにおさん・・・「威厳」は具体的な「もの」で表現しては？
ただしげさん・江戸城の田安門、堂々とした感じを上手に捉えている。

天牛さん・・・あのあたりの吟行でなければこの光景はキャッチできませんね。いい経験をされました。

六点

夏蝶のブレイクダンス風柔し

孤舟

啓子さん・・・蝶のとぶ姿をブレイクダンスとは、現代を映しておられますね。

半世紀馴染みし湯呑み新茶汲む

健介

孤舟選者・・・大切な古ぼけた湯呑みで新茶を味わう喜び。

天牛さん・・・半世紀とは大袈裟ですが馴染んだものには色々あると思います。湯呑が効いています。

滝落つる壺に風呼ぶ木下闇

啓子

ただしげさん・・・涼しい感じを上手く表現している

ゆたかさん・・・まさに迫力ある句です 天とさせていただきます。

亜也さん・・・北の丸の知る人ぞ知る溪谷美!!

※孤舟選者・・・佳句だが、滝は夏、木下闇との季語重なりで残念。

利根渡る鉄橋響き夏に入る

亜也

五郎太さん・・・川幅が広く、少し速度を落として通過する。地下や町中と違い、自然を感じる。

百合子さん・・・情景が目に浮かびます。夏休みに田舎の祖父母の家に滞在中、鉄橋のあの響きに何故か

ホームシックになりました。

五点

天空の峠より見る余花の村

正己

くにおさん・・・「見る」は説明的か。

康敏さん・・・景が見える。余花は夏の季語なので北国の風景だろう。

啓子さん・・・春に遅れて咲いている櫻。仄かに薄墨のかかる日本の山里の原風景のよう。

百合子さん・・・行ったことのない私にも情景が目には浮かびました。余花の意味を初めて知りました。

俳句って豊かですね！

江戸城跡にて

城跡に偲ぶ栄枯や夏の空

ゆたか

正明さん・・・城は矢張りロマンですね！

百合子さん・・・江戸城天守閣の土台を見上げながら、想像したものでした。

風運ぶ青葉若葉の匂ひ濃し

啓子

孤舟選者・・・臭覚を擽る心地よい香り。

とみ子さん・・・初夏らしい心地よい風を感じました。

康敏さん・・・初夏の新緑の森での美しい描写の吟行句。

パナマ帽わざわざ出番作りけり

亜也

健介さん・・・自慢の帽子です。シーズンに一度はご披露して颯爽と！

堂哉さん・・・どんな経緯での帽子でしょうか？自ずと背筋が伸びますね！

昇さん・・・ダンディー振りと得意顔が目には浮かびます。軽妙な佳句。

三恵さん・・・夏になると生成りの麻スーツにパナマを被っていた亡父を想い起こしました。共感する句

です。私の場合、パナマ帽を特に「和服」と置き換えたいです。ところで今回は、どちら

へお出ましになりますか。

四点

首塚の燭の匂ひや若葉風

くにお

孤舟選者・・・若葉風を受けた首塚には特別な感慨がある。

百合子さん・・・三井物産裏の暗がりにはひっそりと・・・将門さんに失礼のないようにやや緊張しながらお参りました。

亜也さん・・・そこはかかない妖気。いつそ木下闇ならもつと…。

司令部はレンガ造りや薄暑光

五郎太

孤舟選者・・・レンガ造りの建物は歴史を物語るもの。

天牛さん・・・司令部と云はれて、分かる人はだんだん少なくなっていくでしょうね。

城跡の鳥の遠鳴き夏木立

五郎太

孤舟選者・・・何の鳥だったのだろう。まさか鴉ではなからうが。

ゆたかさん・・・情景がよくわかります 吟行ならではの句です。

隆さん・・・御三家の内、田安門、清水門はあるが、一橋門は門址（丸紅本社横）と初めて知った。鳥の遠鳴きを聞いたよう。

デパートのお子様ランチ菖蒲の日

康敏

隆さん・・・勿論、男児でしょう。

亜也さん・・・お子様ランチはデパートじゃなくちや。三越が発祥とか。

新緑や日の斑浴びたる乙女像

康敏

孤舟選者・・・新緑のなかで一層輝きを増す乙女像。

とみ子さん・・・木洩れ陽が揺れて 好きなひと時です。

堂哉さん・・・コロナが始まった頃に訪れた十和田湖を思い出します

三点

年齢は逆走出来ずはたた神

健介

孤舟選者・・・いまさらあの輝いていた青春時代には戻れない。

五郎太さん・・・悔いても怨んでも仕方ない。雷神となった道真のことが頭に浮かんたのでしょうか。

柿若葉白を眩しく衣を干し

とみ子

康敏さん・・・洗濯物でも詩になるのだ。季語が効いている。

手古舞の金棒の音夏来る

ただしげ

とみ子さん・・・たっ付け袴の装束と金棒の音、ワクワクします。

木の橋や足音軽し夏近し

正明

百合子さん・・・靴を履いていても足裏に感じる木の感触、スキップしたくなるような感触！

亜也さん・・・リズムよく、乾いた音が響きます。

※康敏さん・・・三段切れです。上五を「木の橋に」にしたら如何でしょう。

新緑の熊野古道や生気満つ

昇

ただしげさん・・・初夏の熊野古道の清々しい感じが良く出ている。

ゆたかさん・・・生気満つ表現がいいです

若葉伸ぶ樹膚（きはだ）に老いの見ゆれども

啓子

孝岳さん・・・年齢を重ねても、若々しさを失わない気概と努力を象徴しているような句。英気を貰いました。

龍平さん・・・何か洒落た2階客席の付いた巨大な Jumbo Jet 機が急に目前に現れた感じ・・・豊かで甘美な衝撃とでも言うか？それともうひとつ、へやはらかに 柳あをめる 泣けと

如くに 啄木」を思い出しました

盛雄さん・・・人の世に似て桜にも老幼はあり

きす船に仕掛け自慢の男達

けい子

五郎太さん・・・粋な句です。そこに同船した女性の句かもしれません。

隆さん・・・「に」を切れ字「や」に替えるとより俳句らしくなる。

薪能面（おもて）は静かに動きけり

けい子

※句会にて・・・面は。の「は」は不要でしょうね。

二点

一列に菅笠並ぶ田植かな

孤舟

ただしげさん・田植えの様子が昔懐かしい。

隆さん・・・川合玉堂の画が浮かぶ。赤玉のついた紐を張り、一列に並んで田植えをした。コメ騒動の今、残しておきたい田植え姿。

※康敏さん・・・「菅笠」と「田植」の季重なり。参考「大前に向きを揃へて田植笠 町田しげき」
親友は仏となりし夏夕べ

ゆたか

天牛さん・・・仏となった親友とはよつぼどの親友でしょうね。うまい表現ですね。

序の口も大きくなりて五月場所

けい子

龍平さん・・・昨今は新しい四股名の読み方を覚えるのにも難儀タラタラでございますが

瀧つせもありて経巡る北の丸

亜也

五郎太さん・・・水音を聞きながら江戸や戦争のことを思い、木下闇を歩いた吟行を上手く詠まれました。
康敏さん・・・北の丸公園に滝があるとは知らなかった。科学技術館や武道館に行っても、残念ながら公

園を巡ったことはない。

一点

都会には泳ぐ空無い鯉のぼり

忠彦

ただしげさん・中」の表現が面白い。

新しき茶室薫風自南来

五郎太

啓子さん・・・「薫風自南来」？・・・調べてみるとこの後に 殿閣生微涼 という句が続く。元は唐の

文宗皇帝の起承の句から詩人の柳公権が作った転結の句だそうです。この後数百年続いた禅語として様々な解釈がなされてきた歴史があるようで、中国の文化を支える一端を知ったような気がして面白かったです。

歓喜呼ぶ白き煙や夏の宵

堂哉

ただしげさん・上」の表現がローマ市民の喜びをよく表している。

新緑に光差し込み命生む

國護

ゆたかさん・・・命生むの表現がいいです。

菖蒲田や江戸の薫りと色見せる

正明

とみ子さん・・・江戸系の菖蒲が集められた御苑の美しい景でしょうか。

怪異譚伝わる寺や五月闇

亜也

啓子さん・・・季語がテーマにぴったり！

※句会での作者のお話によると、栃木県にある大中寺を詠ったもの。徳川家の信仰の厚かった寺で、雨月物語の中に登場するそうです。

母の日の妻はしやぎ出す平和かな

盛雄

啓子さん・・・愛らしい奥様です！

※転記時点で誤りがありました。 母の日よ↓母の日「の」

河鹿鳴くジェンダーフリーの宝塚

盛雄

隆さん・・・近くに星組男役がいる。 東京女子医大には男装の女医がいた。



【青葉会次回句会のお知らせ】

第四百七十回青葉会 開催日 平成七年六月二十六日（木）午後一時から

場 所 世田谷区三軒茶屋 区施設「しやれなあど・6階 部屋名ビーナス」

ご出句について

句会ご参加の方は 「当季雑詠」 5句 ご投句の方には2〜3句を目処としてください。

ご出句締切は 六月二十一日（土）中

尚、句会後の選句締切は七月五日（土）中を予定致します。



【青葉会報】

一、 五月青葉会は、例年通り「吟行」と致しました。場所は北の丸公園。昨今の気象は五月と云つても存外に雨の事が多く、今回も前日夕方方までは雨の予想で心配致しましたが、予報も刻々と変わり集合時間の十時半には薄日が射すか、というほどの天候回復となりました！北の丸公園は九段側の田安門から南に下る恰好で国立近代美術館を出て、句会場の丸紅本社のルートとしました。吟行後の句会には八名が参加しましたが、吟行では六名が三々五々気楽に緑の杜を散策。柔らかな風が樹々を通り抜け、思わぬ森林浴ができた時間でした。

丸紅の会議室では八名が揃い、いつものように句会となりましたが、人数が少ないこと、吟行で参加者はほぼ同じ感想を持っていたこともあり、吟行句の選句部分では、常にも増して和気藹々、軽い疲れが心地よく、夫々のお話も常より饒舌で賑やかな句会となりました。結果はご覧の通り、点数としてはこれまでで最高点（と記憶）の十八点、昇さんの句に票が集まりました。次点も孤舟選者、とみ子さん共に十点を超え、八点の忠彦さんが続き、いずれも五月の句会らしく、ご自分の生活を垣間見させてくださるように詠っておいでです。

また、あれこれ話題が広がる中で、かつての吟行や、青葉会希望者での小さな旅の話題にも広がり、経験の無いメンバーも興味を示していました。今後そうしたイベントなども企画し、新たな句友を募ることも視野に入れて、会員の皆さまにご提案することになろうかと存じます。全く初めてのご友人とごいっしょに参加されても楽しい会に出来たら良いなあと考えております。

二、孤舟選者近詠

せせらぎに耳傾くる座禅草

しやばん玉乗せ縄電車動き出す

菖蒲湯に抱かれて沈む蒙古斑

名曲のやうなせせらぎ山葵沢

妄想と現の間蚊食鳥

三、【関係者近詠】

待望の日本人横綱 大の里

快！日の下開山生まる雲の峰

盛雄

賜杯手にふる里能登へ風薫る

全

浮世絵のごと美男横綱誕生す（無季）

全

招聘成る初女性教師桃の花

眞希子

春立ちぬやはり名のみでありにけり

青史

信仰もおふくろの味花菜咲く

全

春立つ日この先の春数えてる

全

文豪を友かに抱きて卒業す

全

春宵一刻居るべきひとが居てこそ

全

百済野の右かふふとよくなど神

弘子

愛の日の水茎美しき添書かな

全

甲府口雪の甲府をのぞかせて

全

北窓開く失せて久しき物光る

全

励まして枯野にひとつ犬ふぐり

全

初音あり僅かに残る竹林ゆ

全

むくと起き鞆を嗅げり炬燵猫

全

紅梅自慢門灯をいつまでも

全

切干の水にゆるみつ臭ひけり

全

焼芋を割りて秘密を半分こ

全

弔問の帰路の緩歩や下萌ゆる

全

——「森の座」令和七年五月号

横澤放川（日経俳壇選者）選

四、句友のみなさま方から、故 宮内規雄さまへの追悼文及び追悼句を頂戴しております。

宮内様を偲び、茲許謹んでご披露申し上げます。

風のごと逝きたる君や蓮の花

孤舟

アツチャンの待つ浄土へと茄子の花

全

五月雨や社友句友の規雄逝く

天牛

——五月雨るる日に——

宮内規雄君が逝去されたと聞き、驚きました。まだ八十六歳という若さですのに、可哀想な事をしました。記憶が正しければ彼との交際は昭和四十年頃からだと思っています。東通の社員で合併にて合流してきたと思います。最初は四国支店にいた頃、機械を担当していて会ったと思います。何故かいつも親しく接してくれていました。偶々青葉会に入り、更に親しくなり、何でもズケズケ云える中になっておりましたので、社友会などで酒に酔って近づいてくるから「程々にしろ」と云ったりしましたが、それでもニコニコ笑って喋っていましたね。句会では、亡くした奥さんの句を何年も何年も詠んでいるので、「そろそろ奥さんの句をやめろ」と言ったりしたこともありました。

何故か何でも言える仲でした。どんな顔をして亡くなったかわかりませんが、あのニコニコ顔が彼の最も印象的な顔として私の脳裏にきざまれています。本当に「親しい友人を失った」と云う気持ちでいっぱいです。心から冥福を祈ります。（天牛）

天命と言へども淋し涅槃西風

盛雄

星のごと句友消えゆく余寒かな

全

天上に待つ人のあり別れ霜

全

丸紅サービス時代、保険センターのために便宜を図って下さったことを思い出します。献句させていただきます。(隆)

花筏伊作知る人亡くなるや

隆

「伊作（いざく）」は薩摩半島実家ちかくにある古い町名。ご縁の深い人でないと知らない。規雄さんが特別な人になった瞬間であった。

妻の句を多く作るや花万朶

全

愛妻家規雄さん。先に逝かれた寂しさが句からひしひしと伝わってきていました。

コンチエルトほろ酔い笑顔の宮内さん

全

旧丸紅ビルの句会場（レストラン個室）。細い体躯でお酒は弱そうだった。笑顔は今も残っています。

宮内様のご尽力に鑑み、茲に哀悼の意を表します。(龍平)

宮内様とはご一緒させていただいたこともありました。優しい方でした。訃報とは寂しいものですね、ご冥福を心からお祈り申し上げます。(弘子・元青葉会、現、森の座)

追悼句、追悼文を頂きました皆さまには、本紙上を以て改めて御礼申し上げます。

本会報は、宮内規雄様の御長男、宮内雅崇様にお送り申し上げ、ご報告とさせていただきます。

令和七年六月八日

(了)